

Title	一九九九年度修士論文要旨；一九九九年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.1 (2000. 9) ,p.129- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000900-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「日本史学専攻」

鹿児島琉球館と上国使者

—東アジア交易史上における琉球の役割—

深瀬 公一郎

一六〇九年の島津氏の琉球侵入により、琉球は薩摩藩の支配を受けることとなった。薩摩藩は、琉球国王・王府を通じて琉球を間接支配し、幕府も琉球支配を薩摩藩に委ねた。しかし、琉球は独自の国制を基本的に維持し、琉球国王は中国王朝皇帝と冊封・朝貢関係を存続した。近世薩琉関係は、薩摩藩による琉球支配という視点からだけでなく、薩摩藩の支配下における琉球の主体性という視点からも考察する必要がある。本論文は、鹿児島琉球館と上国使者を中心に、近世期における薩摩での琉球の活動を具体的に明らかにし、琉球の主体性という視点から近世薩琉関係の特質について考察することを目的とする。

鹿児島琉球館とは鹿児島に置かれた琉球王府の最先機関であり、上国使者とは薩摩に派遣された琉球使者のことである。鹿児島琉球館の起源は、薩摩に置かれた琉球の人質屋敷であったが、一八世紀前半までに琉球王府の役職が設置されるようになり、琉球王府の最先機関としての機能を果たすようになった。上国使者は、薩摩での服属儀礼において「唐装束」を身につけ、

琉球のアイデンティティを誇示した。薩摩藩から琉球王府への示達や琉球王府から薩摩藩への交渉は、鹿児島琉球館を通じて行われた。琉球王府は、薩琉交渉を有利に進めるために、薩摩において薩摩藩琉球関係役職と親密な交際を行うとともに、薩摩藩士で交渉代理人の役割を果たした琉球館間役の抱き込みを行った。

琉球にとって、中国王朝皇帝との冊封・朝貢関係を維持することは重要であった。朝貢使節の海上安全のための武器の確保や、朝貢儀礼に不可欠な進貢品の錫の確保は、薩摩において行われていた。

一九世紀中頃、中国市場に持ち込まれたヨーロッパ製の西洋反布や中国産の紅花は、琉球によって中国から薩摩に持ち込まれた。その交易規模は薩摩藩による交易制限を上回るものであった。薩摩に持ち込まれた交易品は、鹿児島琉球館に出入りする上方用商人によって、上方市場へと流通した。琉球口貿易では、薩摩藩による交易活動だけでなく、独自の流通経路をもつ琉球による交易活動が活発に行われていたのである。

薩摩交渉における琉球側からの積極的な働きかけや、薩摩藩の統制を逸脱する琉球の交易活動は、近世薩琉関係における琉球の主体性が発揮されていたことを意味する。また、中国への朝貢準備や、琉球が中国市場と近世日本市場を結びつけていたことから、近世薩琉関係は東アジア国際関係のなかに組み込まれていたといえよう。

近世南関東における寺社参詣

— 庶民旅行の興隆と実態 —

原 淳一郎

本稿は、近世における寺社参詣史を一般庶民らによる社会現象として捉え、近世期に何故多くの人々が旅へ出掛けるようになったのかという問題意識を基底にしている。人々の旅への意識、参詣者意識、名所認識といったものへの問題関心をベースに、参詣旅行の繁栄に伴い起こった様々な社会現象を取り上げた。また江戸を含む南関東地方を分析対象地とし、庶民の旅が徐々に浸透し始めた元禄期より、参詣旅行が完全に定着した文化・文政期までを主な時代として設定した。

第一章では、これまで寺社参詣史においてほとんど未開拓な課題であった「名所のセット化」を扱った。近世期に「片参り」「山を割る」などの伝承を残し、特徴的且つ明確な形でセット化した参詣が行われていたとされる。富士山と相州大山を主な事例とした。併せて、両山をセットにした参詣が行われたことよって引き起こされた、富士と大山を結ぶ足柄上郡内矢倉沢往還筋の村々への社会経済的変容の分析を通じて、当該地域における参詣者動向を考察した。

第二章では、江ノ島及び鎌倉への参詣旅行史に、旅日記、紀行文、案内記などの史料から検討を加えた。該当地域の近世的名所化、参詣者の当該地域に対する名所認識、江ノ島、鎌倉へ

の参詣者層の差異、変遷過程を、十七世紀後半から十八世紀前半という、参詣旅行の興隆期、発展期に当たる時期に焦点を合わせて考察すると共に、江ノ島の発展に多大な影響を与えた相州大山詣りを含めた、相模国内の参詣者動向にも触れた。その際、第一章で明らかにした富士・大山間に位置する地域内の参詣者動向と連動する視点を獲得することができた。

第三章では、従来近世期における名所寺社側の動向に関する先行研究は意外にも少なく、また開帳や富籤、勧化といった寺社の宣伝活動とも切り離されて論じられることが多かったことから、成田山新勝寺を事例に、出開帳、居開帳などの宣伝活動と、経営動向、寺院内体制など新勝寺の内包する諸事情とを関連付けて考察した。その際には、庶民の参詣が繁くなる前提として、いかに新勝寺が江戸を初めとした庶民に近付いていったのかということ重要な視点として設定した。

中世成立期における東大寺領と寺院経済

守田 逸人

中世を通じた一権門荘園領主である東大寺は天平創建以来、官寺として律令国家の帰依を受けながら経営されるが、徐々に独自の経済組織を保持する独立権門寺院へと成長していく。本論文では、一権門荘園領主である東大寺を考察対象とし、古代官寺であった東大寺が荘園領主としての成長、律令体制からの

離脱をとげる過程について考えることを目的とし、中世成立期（十一・十二世紀）における東大寺経済について考察を加えた。

第一章では、初期荘園が中世荘園に連なる事例として、北伊賀における東大寺領の個別荘園研究を行った。その結果北伊賀の東大寺領は寺家修造の為の材木物資の獲得地として設定されたことが明らかとなり、東大寺の官寺としての側面が認められる一方、国家の帰依を離れ独立経営を展開する中世東大寺成立の萌芽的側面が奈良朝すで見いだせることを論じた。

第二章では、同じく北伊賀における東大寺の所領獲得政策を論じたが、ここでは北伊賀一帯を寺領化する過程で重要な画期となった湯船・靱田荘の寺領化と国衙による対荘園政策政策の検討を行った。湯船・靱田荘は、初期の段階ではいわゆる太政官符・民部省符、或いは国判等による寺領としての認定・立券がなされていなかったが、古来より東大寺封戸郷としての性格を継承する形で事実上東大寺領として機能していた。その後天喜年中にいたり伊賀国においては、国衙による荘園整理に伴い東大寺封戸物を使補する使補地の整理政策が行われた。その使補地の整理・選定に際して湯船・靱田荘が使補地に選定されなかったことにより両者の抗争が激化しつつも、東大寺はその後約二百年弱の歳月を費やし、名実共に寺領化とすることに成功したということ論じた。

第三章では、問題設定を東大寺経済収集体系の収納状況の解明という観点から、十一・十二世紀の東大寺封戸の収納状況を分析した。十一世紀中葉段階では国衙による封戸進納が、多く

は長期滞納形態をとりながらも、ある程度厳密に行われたことを論じた。また、従来「十二世紀にはいると封戸制は急激に衰退し、受給者への封戸納物の進納状況はもはや絶望的段階を迎える」という学説が大方の見解であった。しかし、東大寺に限っては寺家伽藍の「大破」の都度、国家による強烈な後楯とともに東大寺封戸物の厳密な「催済」が行われていたことを見出し、必ずしも「絶望的な状況」には至っておらず、末永く東大寺が封戸制にしがみつく様相がみられることを論じた。

第四章では、荘園住人等にとって年貢進納の義務がいかなる状態から生まれるのか、荘園在地における公驗文書の効力という点について検討し、権門荘園領主となる東大寺が荘民百姓とどのような関わり合いのもと領域支配を実現するのかについて考えた。その結果、当該期における荘園領主は所領相論に直面し、訴訟を通して改めてその所領の保持が認められたとき、その旨を披露というかたちで荘園住人等に公驗文書が披露される。それに対し荘園住人等は改めて「請文」を作成するという形態がみられることを論じた。逆に荘園住人等が領主支配の正当性を認めなかったとき、年貢等の抑留権が存在したことを明らかにし、十一世紀中葉という早い段階で両者の契約的側面が見出された。

終章では、中世成立期の東大寺による諸々荘園拡張政策を中世東大寺の形成過程として評価できる一方、未だ国家に依存する側面は、少なくとも財政面に限っては否定できないということ論じた。

竹越与三郎と『日本経済史』の成立

堀 和孝

三又竹越与三郎の名著『日本経済史』(全八巻 大正八、九年)は、大正四年六月、交詢社において朝吹英二の主唱の下、実業人計七十五名から組織された「日本経済史編纂会」の支援を受けて、在野の史論家として定評のあった竹越が執筆したものである。本書は、第二次世界大戦以前に五版を重ねて広く普及しただけではなく、一九三〇年には英訳版も刊行されており、「日本経済史」通史の先駆的業績の一つとして注目すべきであると早くから指摘されてきたのだが、史料の典拠を必ずしも正確精密に挙げていないという理由により、本格的な研究は全く行われて来なかった。本稿の目的は、民友社時代の著作『新日本史・上中』(明治二四、五年)や『二千五百年史』(明治二九年)との比較を念頭に置きつつ、本書の歴史観の特徴を考察することである。

『日本経済史』の歴史観の骨格は、民友社時代の二著において既に与えられている。それは、徳川封建社会における地方自治の担い手であった豪農・豪商層の発展の延長線上に、近代日本の「中産階級」の形成を見ようとする平民主義的歴史観である。このような歴史観には、竹越自身、越後の柿崎において代々庄屋を務める家系の出身であったことが強く影響していたのだが、見方を変えるならば、日本の近代化は官僚主導の「上

から」のものとしてではなく、民間主導の「下から」のものとして達成されるべきであり、また達成し得るのだ、という思想表明に他ならない。

明治初期における官営規範工場の設立にみられるように、近代日本の経済発展に対して政府が積極的な役割を果たしたことは周知の通りである。しかし、それらの多くが経営的には失敗に帰し、むしろ最も早く近代的機械制大工業を確立した綿紡績業は、民間企業として発展したものであったことを考えると、政府の役割を過度に強調することは誤りであろう。また、江戸時代以来の豪農層のうち、明治時代以降健全な成長を遂げたものは極めて少部分に止まり、没落を免れたものの多くは国家権力と密接に結び付いた寄生地主へと転化していったことも否定しえない。しかしながら、明治期に輸出の中核を担った製糸業は、農村における在来産業として発展した性格が強く、「上から」の資本主義と一義的に規定することは必ずしも妥当ではない。竹越の歴史認識は、「下から」の近代化という側面を言い当てていた点で、再評価に値するものと言えよう。

『東洋史学専攻』

マムルーク朝時代におけるコーラン読誦者の実像と
コーラン読誦の社会的役割

小林 剛

マムルーク朝時代におけるウラマー（学問・宗教的エリート）の研究は多い。しかし、その中でも年代記や人名事典でしばしばその活動について述べられるにも関わらず、まとまった研究の少なかつたのがコーラン読誦者である。彼らは従来の研究では「非常に貧しく」そのために兼職をしていたとされてきたが、それは本当なのだろうか、というのがこの論文の出発点である。

コーランが読誦された場面は、一日五回の礼拝の後が最も一般的だが、各種の祭やモスクの完成式などあらゆる公的な場面にわたる。そこでコーランを読誦することによって、コーラン読誦者達がいくばくかの謝礼を得たが、その合計額はかなりの金額になる。また、人の集めにくい夜間のコーラン読誦は昼の一・五倍の額が支払われるなど、コーランを読誦させる側であるワクフ設定者もコーランが自らの墓廟で読誦され続けることを望んだ。

また、具体的に二人の人物についてその生涯を記述した。一人はイブン・アルリジャザリーである。彼は著書も残している、当時最高のコーラン読誦者の一人で、居住していたシーラーズからカイロにハディースの読誦のために呼ばれるなど、その活動はイスラーム世界全域にわたっていた。もう一人はイブン・アサドである。彼は有名な人名事典の著者であるサハーウィーの教師で、非常に詳細な記録が残っており、コーラン読誦を専門としていたコーラン読誦者の一つの典事例と考えることができる。

結局のところ、人名事典に名が残るような有名なコーラン読誦者達は、決して「貧しい」とは言えず、そのために兼職していたとは考えにくい。また、コーランは「物」としても「聖なる存在」として扱われた。コーラン読誦者達は、そうした「聖なる存在」から「聖なる音」を紡ぎ出す存在で、文盲の人々が多くいたと考えられる当時の社会においては、コーランそのものとも言える存在だったのである。

〔西洋史学専攻〕

ウィリアム・ダグデイルとイングランドの州共同体

—十七世紀の空間意識と帰属意識—

久保田 貴叔

「ジェントリ論争」以後、イングランド内乱史研究は、地方史の分野で大きな成果をおさめてきた。とりわけジェントリを中心とする自己完結的な州共同体をもちいて内乱の説明をこころみ、アラン・エヴァリットを開祖とする「州共同体学派」の一連の研究は、以後の内乱史理解に大きな影響を与えてきた。しかし近年、内乱の分析枠組としての州共同体の有効性について研究者は再考をうながされ、州共同体の実定性や人びとの帰属意識といった側面を以前にもまして念頭に置かざるを得なくなっている。こうした研究史上の動向を前提として、本稿は内乱期のウォリックシャーにおいて紋章官ならびに尚古家として

活躍したウイリアム・ダグデイル（一六〇五—一六八六）が執筆した地方地誌『ウォリックシャの尚古研究』を手がかりに、同時代人が州（共同体）に対して抱いたアイデンティティについて考察することをめざした。

『ウォリックシャの尚古研究』については、とりわけ州の土地所有者の変遷についての言及に最も力点が置かれていること、および随所に地図が挿入され読者の参照をうながしていることの二点が記述上の大きな特徴として指摘できる。前者の土地所有者の変遷についての言及、すなわち州の先人たちについての言及は州が共有化しなければならぬ歴史的感情的シンボルを確認する行為であり、後者の読者に対する地図的な視点の要求は地図を見る視点と記述を追う視点とが相互反転可能であることを意味している。これらを『ウォリックシャの尚古研究』執筆の背景となったテューダー、ステュアート両朝期の「歴史学革命」、当時の州地図の普及、さらに隣接諸領域の研究成果などと考えあわせ、著者ダグデイルが州を、想像力によって拡張された「全域的空間」として了解し、同書はそうした全域的空間としての州を可視化させることのみであったと仮定した。

以上のような分析から、筆者は現象学的地理学の「実存空間」の概念を援用し同時代人の空間意識と帰属意識との関わりを類推しようとしたところをみた。そして当時にあつては帰属の対象が複数存在し得たことを確認し、州が（第一義的ではなかったとはいえ）人びとにアイデンティティを提供しうる生きられた空間のひとつであった可能性を指摘した。

『ペニーマガジン』（一八三二—一八四五）の編集戦略
—知識の有用性と商品価値—

伊東 剛史

『ペニーマガジン』は一八三〇年代、印刷物が大量に氾濫し読者層が急速に拡大した時期に「有用知識普及協会」から刊行された雑誌である。同協会は安価な印刷物による労働者階級への「有用な知識」の普及を目的に政治家、知識人、学識経験者によって設立された。このような経緯から『ペニーマガジン』は、ミドルクラスの価値観を労働者階級に浸透させるための手段であったとか、あるいは活字文化の大衆化に寄与したと評価されてきた。修士論文では先行研究による評価を踏まえたうえで同誌の編集戦略を明らかにした。一つは、同誌が社会的美德や道徳的価値観を直截に説くのではなく、珍しい動物や道徳的な絵画作品の挿絵に読者の目を引つけ、解説文との相互作用によってあくまで彼ら自身に読みとらせようとしていたことである。もう一つは、同誌の読者対象はこれまで考えられていた労働者階級だけでなく、他の商業的なライバル誌と同誌の理念に懐疑的な人々も含まれていたことである。つまり『ペニーマガジン』は、多岐にわたる読者層を想定して編集されたのである。こうして『ペニーマガジン』の編集戦略を辿ることによって、知識や情報の二面的なあり方が見えてきた。一つは知識を生み出し、伝達する新しい枠組みが求められていたことである。

『ペニーマガジン』が提示したその方法は、博物館を幅広く開放し、美術作品を印刷物によって大量に普及させ、「世間一般の人々」peopleを啓発することだった。同時期に起こった動物公園の入園許可制度やブリテイッシュ・ミュージアムの公開性をめぐる議論は、知識の内容とその受け手をどのように設定するかが広範に問われていたことを意味している。

もう一つの面は、知識を大量生産し、世間に流通させようとするとき、その知識が商品としてやり取りされるようになったことである。「有用な知識」は、道徳的な価値観や社会的な美德を付帯していたが、同時にキャッチフレーズとしても用いられたのである。『ペニーマガジン』や有用知識普及協会の名前を剽窃した雑誌が多数刊行されたことは、これを如実に表わしている。

『ペニーマガジン』はこの知識の二つのあり方が不可分に結びついていたことを示してくれるのである。

ルートヴィヒ・フォイエルバッハの「思弁」との訣別

— 同時代の神学論争の視点から —

富村 圭

一八四〇年代の初頭にルートヴィヒ・フォイエルバッハが構想した「新しい哲学」は、近代哲学の完成としてのヘーゲルの思弁哲学との訣別を告げている。しかし、この「思弁との訣

別」は、近代的な認識主体として孤立した自我の「思弁の際限のない恣意」を批判しながら、結局は「我と汝とのディアローク」という主観主義的な関係に行き着くことになる。

「直接の弟子」として出発し最終的には訣別へと到る、このフォイエルバッハのヘーゲル哲学との対話は、3月前期の宗教的・政治的な現状によって媒介されている。3月前期ドイツの思想的な対立を総括して、エンゲルスは「当時、政治は苦難に充ちたイバラの領域であったので、主な闘争は宗教に対して向けられたのだ」という。しかし、プロイセンにおいて典型的に示されているように、3月前期のドイツでは、キリスト教的な伝統への回帰と社会の近代化が並立して存在していたのであり、近代化の理論そのものが、なおキリスト教と結びつけられていた。したがって、宗教的な論争は決して政治的闘争の代替物などではなく、むしろそれこそが時代の差し迫った問題であった。こうした状況のもとで、30年代にヘーゲル哲学の非キリスト教性をめぐる神学論争が激化し、このなかで神の人格性の欠如を非難されたヘーゲル哲学は人格神論へと立ち戻っていく。一八二八年のヘーゲル宛の手紙のなかでフォイエルバッハが語った「理念の現実化」は、かれの自覚的なヘーゲル主義を示しているが、フォイエルバッハはそれを、神の人格性のうちに基礎づけられたキリスト教的主観性に対する批判の戦略として描いている。そうである以上、ヘーゲル哲学の人格神論への転化という事態に直面して、フォイエルバッハのヘーゲル哲学との関係もまた問い直されざるを得なかった。こうして、フォイエル

バツハは人格神論と断絶した「新しい哲学」の基礎づけを求めて感性の立場に立つのであり、そうすることで、感性を捨象する近代哲学のあり方の全てを、人間の本質を人間の外部に対象化する神学と同一視する視座を得て、ヘーゲルの思弁哲学との「根本的な訣別」へと到る。しかし、それによって、フォイエールバツハは現実の実体的な性格を捉える視点をも失い主観主義に陥ることになったのだった。

〔民族学考古学専攻〕

古代メソポタミアにおける神殿構造の変化

—ウルク後期から初期王朝時代の平面分析を中心として—

神谷 史穂

古代メソポタミアの建築遺構は、共伴して出土する文字資料の内容によって、同地域の古代史研究に多くの知見をもたらしている。とりわけ、神殿から出土した初期王朝時代Ⅲ期に比定される文書群は、神殿を中心とした当時の社会像を明らかにするなど、これまでのシュメール史研究に大きく貢献してきた。しかしながら、ウルク期やジェムデッド・ナスル期の文書群が持つ資料的制約により、シュメール都市における神殿の役割の変化を、文献史学の立場から探ることは極めて困難である。

こうした状況を解決する上で、遺構もしくは遺構出土の遺物

に関する考古学的な議論は不可欠であるが、従来のメソポタミア考古学では、これらの資料を用いて神殿の働きの変化を充分に考察するには至っていない。中でも神殿遺構そのものに対するアプローチは、資料群が時代間比較に適する分布を示していること、また祭儀の場として特に重要であった主室が各遺構からほぼ均質な状態で出土していることから、上記の問題を解決するにあたり有効な方法と言えるにも関わらず、建築遺構は建築史学による平面型式分類の対象として扱われるに留まってきた。そこで本論文では、ウルク後期から初期王朝時代までの神殿遺構六一資料を取り上げ、それらの役割に時代間でいかなる差異が存在するかを主室の室形と面積、および遺構内における主室の位置関係を通じて分析し、前四千年紀半ばから前三千年紀後半にかけての、神殿での活動の変化に関する考察を試みた。

その結果、①ジェムデッド・ナスル期以前には縦長室・幅広室が混在していた主室の形状は、初期王朝時代になると幅広室に統一されていく ②ジェムデッド・ナスル期以前のほとんどの神殿では主室が最大の面積を占めていたが、初期王朝時代に入ると主室以上の規模を示す室が顕著に現れる ③初期王朝時代の神殿の主室は、それ以前の主室よりも神殿の入口からより遠い位置に設けられている、という傾向を看取できた。

以上から、シュメール社会における神殿の平面構成は、初期王朝時代に至って主室以外の場所でもより多くの人員あるいは物資の集積が必要な活動に耐え得るものへ変化したことが判った。この事実と、従来示されてきた文献史学の断片的な成果とを考

え併せると、初期王朝時代に、シユメール諸都市の神殿の主たる役割が、祭儀の場から支配層の公的活動の場へと変化した可能性を指摘できる。

石器研究における折断剝片分析の有効性

—山形県上野A遺跡出土の折断剝片と再現実験資料の比較分析から—

川崎 知成

日本の旧石器時代研究において主要な資料の一つに石器がある。特に日本のような酸性の土壌では、土層に埋没した有機物が残存する可能性が極めて低いため、石器は旧石器時代の人間活動を復元するための数少ない手がかりであるといえる。そのため、日本の旧石器時代研究では、石器という限られた研究材料から最大限の情報を引き出す必要性があり、現在に至るまで多様な視点から研究が行なわれてきている。

このような旧石器時代遺跡から出土する石器の中には、時として明らかな折断の痕跡が観察される資料がある。この折断という現象は、石器が人間によって使用を意図して製作された当時の代表的な生業具であったことを考えると、製作・使用・廃棄等の人間活動による結果の一端を示しているものである。このことは、石器の折断現象が、石器製作から廃棄・その後の土層埋没過程に至る全ての工程に付随する要素であることを示し

ているといえ、石器の折断という現象には当時の石器製作技術・使用法等を導き出すことのできる有用な情報が数多く含まれている可能性が高いと考えられる。

しかしながら、これまでの研究史を概観してみると、この石器の折断という現象を積極的に分析の対象とした研究が少なく、また石器の折断を扱った研究を見ても、個々の具体的な折断が生じる要因の解明に焦点が当てられたものが多く、石器の折断という現象を石器のライフヒストリーと関連させて体系的・包括的に理解しようとした研究は存在していなかったことがわかる。

以上の点をふまえて、本論考では、石器の折断現象に対する研究の有効性を検証することを目的として、まずこれまでの石器の折断現象を扱った研究を集積し、そこから得られた知見・成果・問題点を整理することで、石器の折断現象と石器のライフヒストリーの関連性をモデル化した。次に、実際の遺跡出土資料として山形県上野A遺跡出土の折断剝片を分析対象資料に選択し、再現実験資料との比較・分析から上野A遺跡の性格・機能の推定を行なうことで、石器の折断現象分析の有効性を模索した。その結果指摘できたことは以下の4点である。

第1が、「意図的」「偶発的」に関わらず、全ての石器の折断という現象は、石器のライフヒストリーと緊密な関係性を持つということである。第2が、「剝片作出時の偶発的折断」という現象が生じるメカニズムを、再現実験を行なう過程である程度特定できたことである。第3が、本論考中で用い、結果的に

分析の主体となつた α 角度分析に一定の有効性が確認できたことである。そして第4に、再現実験資料と遺跡出土資料の比較・分析から、上野A遺跡が石器製作址である、というこれまでの研究報告と同様の結果が得られたことである。

以上の点から、石器の折断を扱つた研究には、従来の石器研究とは異なる視点が内包されており、本論考ではその研究の有効性がある程度指摘できたと考えている。

石器製作における加熱行為に関する研究

—特に頁岩製資料を対象として—

渡邊 高潔

石器製作で用いられる加工方法として、「焼く」という方法に関する研究が行われている。しかし、「敲く」「磨る」という石器加工方法に比べて、「焼く」という方法では、多くの加工方法を、十分に模索するまでには至っていない。

このため、本論では、「焼く」という「加熱行為による石器加工方法」の一つとして、加熱時に石器石材が割れるという現象を利用した、加熱行為による石器石材の分割という加工方法について考察を行った。

加熱中に石材が割れる現象は、現在まで多くの研究がなされてきた、加熱により石質を改変する加工方法でも、生じることが知られている。しかし、この加工を施工中に割れが生じた場

合は、石器素材の破損と見なされる。このため加熱中の割れは、加工の失敗時に生じる現象と判断されている。しかし、民族事例から、石器製作中の石器加熱方法には多様性が見られることが確認され、また、石材の採掘時に、この現象が利用されていたという指摘もなされている。

このため、加熱時に割れた石材に対して、石質的に石器製作上不具合が生じるかを検討するために、頁岩という石器石材を用いて電気炉での焼成実験を行った。その結果、押圧剝離と三点曲げ強度の測定から、加熱時に割れた石材が、割れなかつた物と同様、石質的には石器製作が可能であることを確認できた。

しかし、加熱時に割れた石材は、石器素材として使用するには、分割された大きさの点で問題が生じることが考えられた。これは、実験で設定した加熱方法が、石質改変を目的とした加熱方法では、一般的とされている加熱方法を参考にしたことが一因であると推察できた。つまり、間接的な緩加熱で石材全体を均一に加熱し、均一な石質の改変と、石材破損の回避を目的とした加熱方法では、割れが生じてしまった時には、均一に行き渡っている熱が、同時発生的に割れを生じさせ、石材は一度に多数の石片へと細分されてしまったことが考えられた。

このため、加熱中の割れを積極的に利用する石材分割の加熱方法としては、直接的な急加熱による不均一な加熱を想定する方が有効と考えた。そして、焚き火による実験の結果、段階的に生じる割れが、石器素材に十分なサイズの石片に割れた時点で石片を火中から取り出すことを可能とし、割れの進行をその

時点で抑止できることが確認できた。また、その石片を石核として用いて、硬質敲石での直接打撃により剝片剝離が可能であることも確認した。

この加熱行為の結果、分割された石片が、実際に石核等に用いられると、加熱行為による石材分割の存在を、遺物から認識することは困難であると思われるが、加熱により割れた面には、碎片と同様明瞭な打点部が認められないという特徴から、打撃剝離で設定された打面や作業面と異なる面を持つ資料を、接合作業により発見できる可能性があると考えられる。

一九九九年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

中世における女性の地位について

伊藤祐介

享保期の宿駅政策

岡田真樹

鳥取藩在方における狐付・狐持の諸相

中原鴨之

——「在方諸事控」に依りつつ——

桒崎直哉

織田政権と遠方大名との外交関係

平尾知之

松平氏から戦国大名徳川氏への過渡期について

福嶋久美子

——松平広忠・今川領国期を中心に——

平戸オランダ商館長ニコラス・クーケバツケルと

「島原の乱」の関わり

勝頼期の武田氏外交とその奏者

——甲越同盟を中心に——

米国の天皇制温存政策とその周辺

清沢洌の教育観と自由主義

大正期における洋装の導入

——「西洋服」から「日本の服」への転換——

『新論』の尊王攘夷思想

——会沢正志斎の国家論・対外意識・民衆観——

丸島和洋

荒井高志

池原理恵

国見佳織

日本人の性意識の変遷——開放化のダイナミズム——

高橋敏之

高橋史恵

富窪祐紀

被占領下における日本国民の生活・意識

日本帝国主義の成立

富窪祐紀

富窪祐紀

光格天皇の君主意識を探って

中西鏡子

天皇權威の正統化と近代日本国家

樋口航介

幕末期における教育

——橋本左内の福井藩明道館の改革を通して——

林 美和

日米交渉における中国問題

真崎紫都佳

幕末期の朝鮮政策と勝海舟

——三国合従連衡策を中心に——

金澤裕之

近世後期における撰家の家臣

——二条家を例として——

中村佳史

近世日本人の朝鮮漂流

——漂着から帰国まで宗家文書を中心に——

船曳晶子

吉土の足跡をたどる——外交活動を中心として——

池上志帆

持統天皇の生涯とその時代についての考察

伊沢由起子

日本書記にみえる陰陽道

石井さや香

多賀城創建時の東北経営と城柵について

板垣崇

銭貨「和同開珎」についての一考察

大草一允

続日本紀における宮人と女性叙位

小川智子

土師氏の改姓——喪葬から学問へ——

草場奈々

長屋王の変についての考察

佐野絵梨

蘇我蝦夷・入鹿について

佐渡真理子

奈良時代の議政官における藤原氏

山藤ゆみ子

日本古代馬に関する一考察

戸村彩子

隼人と大和政権についての諸問題

林尚孝

「日本靈異記」にみられる死後の世界

渡邊雅美

自然主義作家から劇作家へ

——真山青果、転身の背景——

浅見綾乃

広告が国民に与えた影響

——森下仁丹の戦前の朝日新聞から——

榊原守弥

関東大震災朝鮮人虐殺事件の事実発表に関する一考察 吉岡 拓

近代野球創成期における『教育』と『野球』の一考察 吉田智也

田島歳宣

古代相模国における高座郡の役割について

佐藤良尚

中世下人論のために

——日本中世社会の再検討を目指して——

川鍋 稔

文観僧正について

本願寺発展への模索——覚如から倅如への変革を探る——

森久保宏樹

『漢書』芸文志における兵書

春秋時代の盲人楽師について

中国古代夫婦合葬墓普及の要因

功過格思想の背景

異人に対するイメージの源泉について

伊尹について

儒教的社會における女性と纏足

漢族社会における風水観の相違について

殷墟の埋葬坑について

古代中国における胎教と子供観について

古代中国における肉刑廃止と復活論の背景

廬山會議——彭德懷失脚の意義

若林亜希子

民国期、漢族女性の服装変遷——旗袍を中心にして

汪精衛と「南京国民政府」をめぐる諸問題

山下純毅

抗日戦争中における新聞業の企業的形成

秋瑾について

丸山英峰

毛沢東の教育論

清初天聰年間の諸政策と「天命思想」の関わりについて

沼田朋子

文化大革命の一考察

百家争鳴にみる中国ジャーナリズム

革命根拠地延安での中国女性

清朝初期のロシア認識

日本統治時代の台湾におけるアヘン政策について

毛沢東のリーダー像と人間像

国民革命期の青年——茅盾を中心に

清末湖南における民族主義・民権主義

童乩を中心としたシャーマンの考察

ベトナム難民問題から考察するヌン族の歴史

自伝にみるベトナム華僑史

学校教育のあり方からみた

インドネシア華僑のアイデンティティ

マラッカにおける「ババ」文化の多様性

マレーシアの華人団体

北林宏基

長田洋司

伊藤素子

石川鮎美

山中健太郎

山田浩幸

蓬田圭吾

永榮一博

金田直樹

割石大資

小林 円

加藤桃子

佐土原寿枝

井上智賀子

本橋貴光

文化における長崎華僑

小倉貞俊

オッカムにおける概念の表示について

相場雄作

一〇一三世紀のイスラーム世界における

奥田祐子

中世アイスランドにおける社会形成およびその構造

綾部七生

スフィンクスのモチーフ

坂口裕志

一三世紀末ヴェネツィア共和国の大議会改革に関する考察

飯田卓弥

アラビアンナイトの形態学的分析に関する一試論

小野洋文

一三世紀イングランドにおける司法と民衆

金倉美佐恵

コーラン・ハディースにみる月経の不浄とその分析

嶋田祐子

女性教皇ヨハンナ執筆の動機と経緯について

小池恵美子

イスラーム期アル・アンダルス政治史に関する一考察

安藤彩子

モンタイユにおけるカタリ派受容について

坂井史子

イスタンブルにおける都市景観の歴史的変遷

柳瀬朋美

アキテーヌにおける「神の平和」運動

三宮武志

セルジューク朝治下イランにおける知識人の選択

宮川耕平

ストロツツイ家の結婚に見る一五世紀フィレンツェの家族像

安江麻衣子

イギリス統治期のキプロス島

佐藤勝弥

一九世紀イギリスの高度集約農業について

渡邊裕之

近現代レバノンの宗派主義をめぐる一考察

辻川真也

フランス植民地政策の生命線としての奴隷制

西堀卓司

第一次世界大戦におけるトルコとアラブ

武藤敬弘

一八三四年イギリス救貧法改革

押山牧子

——ジェマル・パシャの回想録をもとに

保坂勇太

——大土地所有者の利害と改革の限界——

大原 健

第二次世界大戦までのペルシャ湾岸の石油開発

宮原牧子

エリザベス一世治世期におけるカトリック教徒

永峰由梨

中世イングランドにおけるキリスト教の受容

高森彰弘

十九世紀パブリック・スクール改革にみる

薄井健太郎

中世スコットランドにおけるノルマン人の進展

大橋岳夫

アメリカにおける民族問題

高地健太郎

第一回十字軍の勝因に関する包括的考察

生澤裕文

ユーゴスラヴィア——その解体と民族問題——

明石礼子

ゴドフロワ・ド・ブイヨンについての考察

山村はづき

英国における非営利民間団体の歴史的展開とその活動に関する

樋口 稔

一三八一年大反乱の性質・意義について

森内健吾

考察

アルフレッド・セイヤー・マハン

——社会・経済的観点からの考察——

光山忠良

ヨーク朝最後の王についての考察

ジオルジュ・デュビーの集合表象論

「西洋史学専攻」

光山忠良

「西洋史学専攻」

光山忠良

エラスムスのキリスト教

——ルネサンスという文脈の中での位置づけ—— 西澤奏子

ルソーの「自然人」にみる両義的思想についての一考察

金井均之

初期ヘーゲルにおける「宗教」の意味

——民族宗教構想とその挫折——

クラウゼヴィッツの「戦争論」

一八四八—四九年革命におけるドイツ統一問題について

大澤澄人

ベルリンにみるドイツ一八四八年革命

——革命にとって労働者とは何であったか——

樽井一郎

〔民族学考古学専攻〕

アクロテイリの壁画に関する考察

——細密風壁画とギリシア叙情詩との関連性—— 大崎こず恵

「暗黒時代」とも言われるギリシア初期鉄器時代について

——クレタのパツオス遺跡を題材に—— 石田智之

墓制におけるトークンの役割についての一考察

——メソポタミア・ガウラを中心に—— 中尾 有

ローマ帝政期におけるドムスのプランの変化

——カンパニア地方とオステティアの出土住宅の比較から—— 諸隅紅花

ルーン文字の研究

——初期銘文における呪術性について—— 加藤清久

古代エジプトの灌漑農業について 村上達也

ポエニ期におけるカルタゴの墓制

——紀元前5世紀の転換点—— 杉本 豪

イスラーム都市の邸宅構造

——中庭と広間に関する考察—— 高居克彦

セト神信仰について——オシリスの殺害者セト—— 薄井康蔵

ポアズキョイの防衛施設に関する考察

——古代オリエント世界の戦争技術を踏まえて—— 糟谷武人

ソロモン神殿——その構造と建設の背景—— 中野 亮

クレタ島クノッソス遺跡の性格について 松久健治

台湾の食糧椰風習——海岸アミ族を中心として 小田聡子

相撲の宇宙論 村島正浩

昭和初期のジャズ・ブームに関する一考察 坂井日名子

小湊フワガネク遺跡における海洋環境の利用について

——出土禦魚と骨ヤコウガイの分析から—— 名島弥生

東南アラスカのトーテムポール 千葉茂樹

マダガスカルにおけるイネ栽培の地域性 北條雅樹

現代レイヴカルチャーについて 村田篤史

庚申塔の分布にみられる地域性

——松戸市千駄堀を中心として—— 西川智久

種子島における丸木舟製作 伊藤 剛

北東アジアの「民族」と人種区別 岡崎健治

ヴェトナム中部山岳少数民族と南ヴェトナム解放民族戦線

——エデを中心として—— 今西 章

来訪祭祀に関する一考察

——パントウとナマハゲの比較から——

服部直人

中米グアテマラの祭祀儀礼をめぐる一考察

藤井文子

長江下流域における良渚文化の生産工具

熊谷千佳子

水資源のエスノ・ヒストリー

——宮古島狩俣における住居域の変遷

廣瀬康輔

四国遍路と四国霊場

石井龍一郎

イオマンテと近代アイヌ教育制度

境井将人

郡上八幡の創り方・売り方

藤野一樹

欲望と女性——岡崎京子の世界——

見米奈穂

現代トンガ王国の送金ネットワークについて

川村聡之

大東亜戦争期台湾におけるメディアと台湾イメージの形成

小檜山郁

沖縄人からウチナーンチュへ

——現代沖縄人社会と新たな民俗概念の創出

鈴木大道

マオリ・アイデンティティ表明の場としてのサイバースペース

深山直子

南房総和田浦「タレ」の民族誌

伏見由香里

——現代クジラ食にみる「伝統文化」の再考

堀江智子

東南アジアにおける茶の利用形態

青木江梨花

陵墓——その実態と問題点——

青木江梨花

海浜部における中世遺跡の採貝活動

小島奈々子

——横須賀市蓼原東遺跡出土のハマグリ分析を通じて——

八王子城と一乗谷朝倉遺跡

小嶋 糧

——陶磁器における両者の検討——

里 潤治

縄文時代の落とし穴研究

吉川 祐樹

近世の遺跡から出土する焼き塩壺に関する一考察

藤山 龍造

南関東西半部における有舌尖頭器の形態変異をめぐる一考察

藤山 龍造